

四、それぞれの心

遠く、遠く、何処までも高い空。

遠く、遠く、何処までも続く海。

そしていつまでも絶えることのない、星々の瞬き。

この世界は、不思議に包まれている。

自分は、この世界の、いったいどれほどを知っているのだろうか？

「魔を探求すれば、この星々で起きていることもすべて解るようになるよ、天音」

あの星々の輝きにも勝るとも劣らない雛子の得意げな笑顔が、天音の脳裏に焼き付いて離れない。魔法とは雛子にとって、それは知識で有り、希望で有り、夢なのだ。そして、この目の前に広がる自然のすべてを、知ろうとしている。

あの雛子の笑顔が、魔法に頼り切った笑顔が、天音は羨ましかった。

魔法を学んできて、空のことも、星のことも、海のことにも気になかった自分が、なんだかかすごくちっぽけに思えた。

魔法とは、本来、世界の摂理を知るためのもの。

魔法を見いだした以上、それを見いだした者は、その魔法を通してこの世界を見、そして己を魔法に委ねるのだ。

自分もそうだったではないか。事故で四肢の大半を失い、何度も死の淵を彷徨い、それでも兄に、兄に会いたいという一心で芋虫のように這いずり回りながら生き続けた。

しかし、目を開けるとそこに兄はいなかった。けれど諦めきれない。

兄は、兄はどこかにいる。

死んでも、どこかにいる。

その答えを導き出せるのが、魔法だった。

自分のすべての希望を魔法にかけた。

身体も、心も。

だから、今がある。

兄のいる、今がある。

それなのに……自分は、幸せになれたのか？

「聞いているの、天音？」

「きゃ……！」

彩のドアップの顔が視界に飛び込んできて、そこで天音は我に返った。

「ボーツとしてる場合じゃないのよ？」

「彩は不機嫌そうに口をとがらすと、コツンと天音の頭を軽く小突く。

「……………」

だが天音はどう返していいか、よく解らなかつた。

「天音の命が狙われてる理由がわかつたつてのに、もつと真剣になりなさい！」

「……………」

そんなことを言われても……実感なんか無い。突拍子過ぎて。

「わたしを狙っている方は、わたしよりも魔法に長けているのでしょうか？ ならばどうしよう

も……………」

天音はふう、とため息をつく。

「だから、戦う方法を教えてやるつつつてるんでしょーが！」

「教えてもらつて、どうするんですか？」

「はあ？ そいつに勝つ以外に何かあるのよ！」

「勝つつて、どういふことですか？ その人を殺すつてことですか？」

「そうよ」

「そんなこと、わたしには出来ません」

「あのね……………」

「人を殺すなんて……」

人を殺すことを拒むネクロマンサー。思わず彩は吹き出しそうになった。人を殺さないネクロマンサーなど、おそらくこの世界始まって以来、初めてのことであろう。

「じゃあ、どうするのよ？」

彩はイライラしながら一升瓶に手をかけた。

「そんなこと、わからないです……」

「ふん！」

それから沈黙が続いた。

彩の酒を注ぐ音。それを飲み干す音だけが、社務所に響き渡る。

不意に、スイとふすまが開いた。

「彩先生、晩御飯ができました」

ふすまの向こうに姿を現したのは、紗雪だった。

「ん〜……」

彩はふと、晩御飯という言葉聞いて良からぬことを思いついた。どうせ天音が死を覚悟しているのなら、自分が天音を食ってしまう方がマシだと思ったのだ。敵の手に墜ちるよりも先に食べてしまった方が、少なくとも彩にはプラスになる。

「彩先生、よだれが」

「そんなにお腹が空いていたんですか？」

「あ、いや……」

二人に突っ込まれて、彩は慌ててよだれを拭いた。

「そういえば、ふんと人を食っていない。」

「食う必要も、今のところはないが……」

「困ったわねえ」

「彩先生が、天音を狙っている奴をやつつければいい」

「紗雪がふとそんなことをほそりと言う。」

「それが出来りゃ、苦労はしないわよ」

「彩先生よりも強い？」

「弱い」

「じゃあ、どうして出来ないの？」

「バランスって奴かしらねえ」

「バランス……？」

「あたしが天音を狙ってる奴を殺したら、いろいろと面倒なことになるわよ」

「何故殺したのか。」

「彩が何か企んでいるのではないか。」

そして、この村に何かあるのではないか。
世界中の賢者たちから調べられるだろう。

下手をすれば賢者のみならず、その背後にいる守護者たちを敵に回すかもしれない。村の存亡に関わるであろうし、彩はそれらの勢力と戦うか、逃げ回る生活になるだろう。

村に関わっている紗雪たちだって、どうなるか解らない。

ひよっとしたら、陸という存在にも影響が出るかもしれない。

「この世界はね、意外と繊細なバランスによつて保たれているのよ」

彩は天音に説明したことを、もう一度話し始めた。

「この世界にはね、あたしみたいな強い奴がけっこういるのよ。そういう連中が己の欲望の限りを尽くしたら、どうなると思う？」

「世界が滅びそう……」

「ま、そうね。なので、お互いを監視し合いながら、世界を保ちましょうということにはなってるのよ。ま、あくまでも表向きだけどね」

往々にして、その協定は守られていない。欲望のままに行動する者も決して少なくないのだ。さらに言えば、彩はそもそもその協定には参加していないから、好きに行動してもかまわないのだが……。

「で、人間でも強くなっちゃった奴つてのもいてね」

「天音のように？」

紗雪が向き直って天音を見つめた。

「わ、わたしは別に強くはないです……！」

「ケンカは強くなくても、人を生き返らせるだけの力は持つてるわ。それは充分、人間の枠を超えたことでしょ」

「……………」

「人間たちは考えたわ。そういう強力な力を持った人間は、増えたら大変なことになるってね。けれど少なすぎても、困る」

「どうして？」

「あたしたち物の怪に負けちゃうでしょ」

「なるほど」

「長い長い歴史を通して、あたしたちと戦ったりせめぎ合ったりして、妥当な数に落ち着いたのよ」

「それは、何人なの？」

「六〇〇人って聞いてるわ」

「多いのか少ないのか、よくわからない……」

「んー、ま、妥当かな」

自分たち妖怪の力、そして世界の場所場所に住まう神々、さらには悪魔や天使、人間以外の種族たちなどを鑑みて、六〇〇という数字は妥当だと彩は感じていた。そもそも六〇〇人とはいえ、それぞれには天使や悪魔の加護があったり、神々の加護があったりする。

すべてがすべて、人間と戦っているわけでもない。

この世界全体のバランスの中に、六〇〇人の特殊な人間たちも組み入れられているのである。

「そして、彼ら六〇〇人のことを『賢者』と呼ぶわ」

「賢者には誰でもなれるの？」

「天音のように、人の枠を超えることは、努力と才能があれば出来るわね」

「つまり、賢者の力をも身につけたら……」

「すでに賢者である者が、人数を調整するために殺しに来るわけよ」

「だから、天音の命が狙われた……」

「そういうこと」

何のことはない。

構造は実に単純だった。

「で、殺しに来た賢者を、逆に天音が殺し返せば……」

「天音が賢者になれる？ それで賢者はプライマイ〇、六〇〇人のまま」

「そういうこと、簡単なことなのよ、紗雪」

「わたしが……わたしがもう二度と魔法を使わないと誓ったら、それではダメなのですか？」

「いいアイデアね。けれど、それを誰が担保するのかしら？」

「天音が魔法を一生使わない保証は、何処にもないということ？」

「そう。これから先、何が起るかも解らないでしょ？ 天音の気が変わるかも知れないし、

天音にその気がなくても、誰かが天音の力を欲して、天音を担ぎ出すかも知れない」

「彩先生がずっと天音を監視するとか」

「それもいいアイデアね。確かに、あたしのような強い存在が保証人になることは、過去にもないこともないわ」

「じゃあ、彩先生が保証人になればいい」

「フフ、それを天音の命を狙ってる者が納得するならね」

「……………」

「……………」

二人は黙った。

そもそも、天音の命を狙っているのは誰なのだろうか？

「この世界にはね、有象無象の輩が己の覇権を求めて、日々ぶつかり合ってるわ。かつてはあ
たしもその中にどっふりとつかってた」

人間になりすまし、朝廷をだまくらかし、欲望の限りを尽くした。その時の名前は藤原得子。

今では思い出したくもない名前だ。

謀略と裏切りと欲にまみれた世界。

「本来なら、あんたたちは知らなくても良かった世界よ」

彩は少しうなだれた。

そして後ろを振り返った。

彩の振り返った視線の向こう……つまり神社の裏手には、墓がある。

妖怪たちの墓だ。

それは方墳のように盛り土をしてあり、簡単ではあるが石が積まれている。

名は刻まれていない。

数が多いからである。だが、彩はそのすべての名前を記憶している。

そしてそこには、自分が殺した者の魂も、葬られている。

「天音の命を奪うことになったのは、ルイーゼ・アンナ・フォン・ホラント。汐碕市の市長で

シュレンベルグが支流の一つ、橘家の執政よ」

「いきなり話がとんで、わからない」

「いいから、聞け！」

「はい……」

「鈴鳴屋を汐碕市に出したでしょ？」

「出した」

「そこに天音が行き、そこで天音が賢者に発見された」

「された」

「と言うことは、その土地の賢者が天音を殺すことになるわ」

「それが、汐碕市の市長ということ？」

「そう。もう一〇〇年以上生きてる奴よ」

「まあ……」

ずっと黙っていた天音が、素直に驚きの声を上げた。

それは、一〇〇年以上生きている市長に対する、魔法使いとしての素直な感嘆の声だった。

「ただ、市長と天音では釣り合いが悪いわ」

「釣り合い？」

「市長の方が強すぎるってことよ。市長が本気で殺しに来たら、瞬殺どころか、生きていた証
抛まで消されるでしょうね」

「こわい……」

「フフフ、それが賢者の力よ」

「そんな怖い人たちが六〇〇人も……」

「市長クラスが六〇〇人もいるわけじゃないわ。今回、天音の命を直接狙いに来ているのは、

市長の部下でも一番の格下。六〇〇人の中でも、下から数えた方が早いくらいに弱い奴ね」

「ふーん」

「つまり、天音でも勝とうと思えば勝てる相手ってこと」

「わたしも手伝う？」

「あー、そうね、紗雪ぐらいだったら、手を貸しても文句言われなくても知れないわね」

「人を凍らすくらいなら、簡単」

「やめて!!」

不意に、天音が大声を出した。

「そんな人を殺す相談なんて、やめてください」

「でも、殺らなきゃ、天音が殺られんのよ？」

「どうしてもですか？」

「どうしても」

「逃れられないのですか？」

「地の果てまで、追ってくるわね」

「わたしが、兄を生き返らせたから……ですか？」

「ま、そういうことになるわね」

「わたしが、人を生き返らせる力を身につけてしまったから……」

「もう後戻りは出来ないわ天音。あなたは賢者に匹敵する力を手に入れてしまったのだから」

「やはり、魔は……魔というものは、不幸を呼び込んでしまうのですね」

「少なくとも、あなたたち人間にとつてはそう言うものかも知れないわねえ」

「そんな突き放した言い方をするなんて、彩先生らしくない！ 彩先生は、天音を救いたいと思わない？」

紗雪が珍しく、息を荒らげた。

「助けたいわよ——」

だが、今度は彩が声を張り上げる。

「しかも、なまじつか不可能じゃないからたちが悪い！」

その声は、少し震えていた。

「けれど……そうなたらこの村はただじゃすまないし、この世界のバランスに少なからず亀裂を入れることになる。そしてあたしは、また、戦い続けなければならなくなる」

謀略と裏切りと殺戮の世界へ。

何者も信じられない、誰にも心を許すことが出来ない殺伐とした世界。

もう、あの世界に戻るの……いや、いつかは戻るのでろうと、彩は何となく察している。

自分は善人でもなければ聖人君子でもない。妖怪であり、九尾の狐であり、日本中を恐怖のどん底にたたき落とし、悪の限りを尽くした伝説そのものである。

だが……。

「許して、今はあの世界には戻りたくない……」

彩は天音の肩に手をかけると、振り絞ったかのような細かい声で、つぶやいた。かつての自分の仲間が見たら、あざ笑うであろう。

かつての自分に殺された魂達が見たら、齒ぎしりするであろう。

かの伝説の妖怪が、声を押し殺し、人間ごときに許しを請うた瞬間であった。

「彩先生……?」

だが天音も紗雪も、彩のその決断の重さを理解することは出来ないだろう。

* * *

夜の八時過ぎ、鈴鳴屋の看板が裏返され、クロード表示になる。

パサージユの人通りはこの時間でも衰えることはなく、雛子と凧は最後のお客さんを見送った所だった。

「お疲れさん」

凧が冷えた缶ビールを雛子に差し出す。

「あ、ありがとう」

雛子はためらいもなく、それを受け取った。

雛子がこの鈴鳴屋を手伝うようになって二日目。

「今日もたくさんのお客さんだった……」

雛子は鈴鳴屋のエプロンをたたみながら、肩をほぐす。

「この分じゃ、来月の在庫が心配ねー」

凜はホクホク顔で、レジのお金を数える。

「世の中不景気だというのに……」

雛子は凜の数える札束に目をやって、つぶやいた。

「不景気、だからじゃない？」

「え？ あ、そうかも……」

不景気だからこそ、鈴鳴屋で扱う癒しグッズが必要なのだ。しかもここで売っている癒しグッズは、気休めや偽物ではない。魔法のかかった真正正銘の癒しグッズだ。

「天音にまた商品を作ってもらわないとねー」

「全部、天音が作ったの？」

「ううん、妖怪が作ったものも結構あるわよ。あとは彩先生が作ったものもあるけど、彩先生はねー、あんまり頼りたくないのよね」

「何か問題でも？」

「お金取るのよ！」

「あ、そう……」

「じゃあ他のは無料タダなのか、と雛子は思った。

「ま、でも、儲かってもお金の使い道はあんまりないんだけどねー」

「支店を出すとか」

「そうね、夢よね。でもウチの商品って大量生産できないから、支店にも限界があるけどね」

「あ、うん、そうだね」

鈴鳴屋で売っているものは工場でポンポン作れるものではない。一つ一つの商品に魔法を込めなければならぬ。

「ねえ、雛子？」

「なに？」

「雛子は天音みたいに、商品に魔法を込めたり出来ないの？」

「あ……えーと……それは」

出来ると答えたいが……そんな魔の力は、まだ雛子にはなかった。

「まだ、できない……」

「そうなんだ。二人いれば、商品もたくさん作れたのに」

凜は本当に残念かおそうな表情をした。

「そのうちできるようになる……というか、できるようにならなくちゃいけない」

「へー、じゃ、できるようにになったらウチの商品つくるの手伝ってよ」

「無料はイヤだ」

「えー!!」

「ちゃんと仕入れ値を設定して欲しい。それが商売というもの」

「ちっ、意外に固いわねー。天音なんて何も言わずにホイホイ手伝ってくれたのに」

「魔法だって無料じゃない」

「もちろん経費は出すわよ、経費は。触媒とか」

「人件費も大事。それに儲かってるんだから、払って欲しい」

「まだ赤字よ! 彩先生に三〇〇万でしょ? 天音にも二〇〇万工面してもらったし」

「二〇〇万も!?!」

「天音の別荘にある絵画とか骨董品とかを売ってもらったのよ」

「なるほど……」

「でもこの分だと、今年中には借金返せそうだけど」

「じゃあ来年からお金を取ろう」

「チツ」

「さて、けっこうな時間になってしまった。帰る」

雛子はいつの間にか飲み干して空になった缶を、カウンターに置いた。

「お疲れさま」

凜がそれを受け取って、クシヤツとつぶす。

「……………」

雛子はゆっくりと立ち上がると、何となく店の出入り口を見た。

それからすいーっと視線を動かして、店内の方も見る。

当然ではあるが、冷泉天音の姿はなかった。

「いつ……天音は帰ってくるだろう？」

雛子はい、つぶやいてしまった。そもそも鈴鳴屋を手伝うのは、天音に会うため。

「彩先生は二、三日だって言ってたけど……」

「でもこの街は天音にとっては危険になってしまったから……」

「うーん、それはそうだけど……彩先生に聞いてみようか？」

凜はカウンターに備え付けてある電話の受話器に手をかけた。

「あ、いや、そこまでは……」

と、雛子が言おうとしたとき、上の階でなにやら大きな音が響いた。

「わ、わ……！」

雛子が思わず驚きの声を上げる。いつも冷静な彼女にしては、珍しいことだ。

「ん、どうやら、帰って来たみたいよ？」

「え？」

凜が少し呆れたような声を出しながらも、パサージュの上へと上がって行ってしまった。

「待って……！」

雛子も後を追う。

急な階段を上り、凜の尻尾を追いかけるが、猫又の運動能力は人間のそれを遙かにしのぐらしい……いや、正確には雛子をしのぐと言った方がいいかもしれない。そもそも雛子が運動は苦手なのだ。

「んふ〜〜ただいまー」

酒臭い息をまき散らしながら、まず視界に飛び込んできたのは、九尾の狐だった。そのふっさふさの尻尾の向こうに見覚えのある顔。天音だ。その顔を見たたん、雛子の顔はほころんだ。まるで恋人に会ったかのような、好きな人に出会えたときのような、そんな笑顔だ。

そしてもう一人、見たこともない真っ白い女の子がいた。

「彩先生、登場が派手すぎるのよ。近所迷惑なんだから、やめてくんない？」

凜がプンスカ怒りながら、ひっくり返ったコタツを元に戻していた。

「えっと……」

「紗雪です」

相変わらずの木訥とした声で、紗雪は短く自己紹介をした。

「初めまして……わたしは、神宮司、神宮司雛子」

「よろしく」

紗雪の反応は、初めて会う者からすると、機嫌がいいんだか悪いんだかよく解らない。

「しかも紗雪が来るなんて聞いてないんですけど！ 部屋が寒くなったらどーすんのよ!」

「いやあ、ついていくって聞かないから、連れてきちゃった〜ケタケタケタケタ」

「こんの、酔っ払いが〜紗雪の布団、ないからね!」

「大丈夫、かまくらを作らせてくれれば、わたしはそれでいい」

「いくらでも作れるわよ!」

外は銀世界だ。かまくらなど作り放題だろう。

「この子はね、雪ん子なのよ。有り体に言えば、雪女?」

「なるほど、ネコには天敵というわけか」

「そうなのよ! 寒いのがきらいっ!」

「冷たい女なんだから、しかたない」

紗雪はそういうとさっさとコタツの前に座ってしまった。まるで自分家にいるかのようだ。

「お茶も出ないの? ここの家は……」

そしてぼそりとそんなことをつぶやく。

「お酒も出ないの？ こん家は……」

いつの間にか彩が紗雪の隣りに座っていた。

「あ〜ん〜た〜ら〜……!!」

凜が拳を振り上げる。

「にぎやかだ……」

「こんなことが、村では毎日起きてるんですよ？」

天音が呆れながらも、少しホツとしたような表情をした。

「これが妖怪たちの日常？」

「クス、そうとも言えるかもしれないね」

「おらー、酒持ってこーい!!」

「メチルアルコール飲ませるぞ！」

「お茶……いつもの狭山茶がいい……」

「今、仕入れてないの！ 一〇〇円ショップで買ってきたお茶あるから、自分で入れなさい！」

「一〇〇円ショップのは、何が混ざっているか解らない……」

「妖怪でしょ!? 何が入っても大丈夫よ！」

「おーさーけー!!」

「ああっ、もううるさいっ!!」

「凜がまるで二人のお母さんみたいだ……」

「フフ、こういうとき、常識人は損ですよね」

「確かに……」

「でも、戻ってきて大丈夫だったの？」

雛子の関心事はそこだった。

天音がこの街に戻ってきてくれたのはすごく嬉しいけれど、この街にいることは天音にとつては危険なこと。

「大丈夫じゃないですけど、どこでも大丈夫じゃないらしいので、戻ってきてしまいました」

天音は仕方ないとばかりに、笑う。

「それってどういうこと、かな……？」

大丈夫じゃないということは、命はまだ狙われていると言うことなのだろう。そして、どこでも大丈夫じゃないと言うことは……汐碕市を出ても、命は狙われ続けるということなのだろうか。

「だから、神宮司さん、あなたのためにわたしは戻ってきました。いえ、これはわたしのためでもあるのかもしれない」

天音は雛子の手を取ると、雛子を見つめた。

小さな手がわずかに震えていることを、雛子は見逃さなかった。

「待って、天音……！」

このままだと危険だと雛子は言葉を続けようとしたが、それを天音が遮った。

「わたしの魔の力を、神宮司さんにもっと知ってもらいたい、そう思っただけです」

「天音の……魔の、力……？」

「それが、わたしの今の精一杯ですから……！」

「というわけで……！」

そんな二人の間に、いきなり彩が割って入った。

「うわ……！」

「今夜は泊まっていきなさい」

ぶわーとお酒の臭いが、二人の鼻をつく。

「外泊するって、親に言ってきたくない」

「まー、そんなのどうとでもなるなる。女しくないんだし」

「それはそうだけ……」

「なんなら、あたしが電話してあげようか？」

「いい、自分です。それに、あなたにはお願いしたいことがあったから」

「へ？」

彩がキョトンとする。

「あなたの天音の加護を解いて欲しい」

「解いてどうするのよ？」

「天使の加護をつけたい」

「アッハハハハハハハハ！ そんなこととしても、何も変わらないわよ、魔法使い。少なくとも、人間の加護じゃないとね」

「人間の……加護？」

「あんた、天使に言われなかった？ これは人間が抱えている問題だって」
「う……」

「天音の命が狙われることに関して、あたしの加護も、天使の加護も何の役には立たない。

ま、だから戻ってきたんだけどね、この街に」

彩はそう言うと、天音に視線を向けた。

「はい」

天音もしっかりと頷く。

「そんな」

「だから加護のことは気にしなさんな」

「むう……」

「いろいろ迷惑をかけてごめんなさい、神宮司さん」

「大丈夫、天音がこの街に戻ってきてくれただけで、わたしは嬉しいから」

雛子が天音の両手をしっかりと握る。

「そ、そこまで言われると、照れますね」

天音はうつむくと、少し顔を赤くした。

そしてなんだか、兄のそばにいるよりも、この場所にいた方が自分は落ち着くことに、天音は気づき始めていた。

* * *

翌朝――。

「時間、それは事象の変遷によって生まれるものではなく、確固たる次元として存在しています。ですから、わたしたちはまずその時間をとらえることから始めなければいけません」

まだ鳥たちさえも鳴き始めていない午前4時、天音は熱心に雛子に語り始めていた。

「魔で時間をとらえることは、なかなか難しいと思います。なぜなら、触媒を用意して呪文を唱えれば、あとは勝手に時間が経過して、魔は成就するからです」

「うんうん」

「魔で時間をとらえると言うことは、呪文の詠唱から触媒の変化に至るまで、すべてを自らで

コントロールすることになります。それは途方もない作業で、今まで一瞬で成し遂げていたような術が、何倍もの長さになるでしょう」

「い、いまいち想像出来ない……」

雛子は頭を抱えてしまった。

「考え方を根本から変えないといけません。時とは、この物質同様、長さがあり、実際に捉えられるものなのです」

天音はそう言うと、触媒を取り出し、魔を扱うものならば誰しも唱えられるであろう、*Read Magic*の準備をした。雛子もそれが何の呪文であるか、すぐに理解する。

「いいですか、エンチャントとは、魔を物質にかけることではありません。魔の作用を、自分の起こしたい時間軸に割り当てて制御することなのです。魔の起こりを、そのまま自然に任せるとはなく、すべての反応を起こしたい時間に合わせてコントロールしていくのです」

雛子にとってそれはまったく予想にもしなかった魔法の考え方だった。

紙に火をつければ、あとは酸素がある限り、炭化するまで燃え続ける。

いやもっと簡単なことと言えば、坂の上に置いたボールは重力によって下へと転がる。魔も同じことだ。

触媒を用意し、呪文を唱え、起こしたい現象の条件をそろえる。

あとは手順通り呪文を唱えれば、理の通りに魔は発現し、意図した通りのことが起こる。確

かにそこに「時間」というものは必要不可欠ではある。時間が経過しなければ魔の現象は次へとは進まないからだ。しかし時間は自動的に進むものであり、条件さえ整っていれば、時間の経過とともに魔は効果を発揮する。

しかし冷泉天音は、それではダメだという。

その時間の経過そのものと、魔の現象そのものの関係を自分自身で作り出せと言うのである。そんなことが可能なのだろうか？

時間とは、人間が制御できるものなのだろうか？

「時間そのものを制御する魔法はありません。けれどそれは非常に高度で、わたしも到達できていません。重要なのは、魔の効果を時間に囚われずに……いえ、時間とは独立して、意のままの時点で効果を起こすようにすることです」

「そうすることによって、ある魔はそのままその場に留まり続けますし、ある魔は未来のある時点で効果を発揮するようになるのです。そして、それがエンチャントの仕組みなのです」

そう言うとき天音は先ほど用意したリード・マジックの呪文に様々な呪文を織り交ぜながら実現していく。すべての呪文が終わったとき、リード・マジックの効果は起きなかった。これが雛子ならば、呪文を唱え追えた時点でリード・マジックが発動する。

「三分、待ってください」

天音はゆっくりとそういった。

「ゴクリ……」

雛子は頷くと固唾を吞んで、黙って、ただ待ち続けた。

三分後。

天音の言う通り、リード・マジックが発動し、雛子は天音の魔道書の一ページを読むことが出来た。

「すごい……!」

雛子は素直に感動した。

しかし、初歩の魔法であるリード・マジックの呪文が、何倍にもふくれあがった。

魔が起きるすべての過程の間に、時とつなぎ合わせるためのいくつもの呪文がおり混ざっているのである。

「まずは一番簡単なディレイから教えます。これは魔法の発動を遅らせるための仕組みです。もちろん、遅く発動させたければさせたいほど、呪文は難しくなります」

「う、うん……」

「ですが、今の長い呪文の中で、神宮司さんが知っている単語が出てきたと思います」

「え？ あ……!!」

天音が唱えた呪文を、憶えている限り頭の中で思い出しながら、雛子はいくつもの知った単語を見つけた。

「気付きましたか？」

「コンティニユアル ライト Continual Light と、マジック ミサイル あと Magic Missile に使われている」

「はい、その二つはどちらもエンチャントと関わりがあります」

「コンティニユアル・ライトは、物体に光の魔法をかける。物体はずっと光り続ける……ということは魔の光の力がその物体に付与される」

「はい、その通りです」

「マジック・ミサイルは、ターゲットを指定しなければ術者の周りに留まり続ける。ある時間過ぎると、消えてしまう。これは矢を持続させている？」

「はい、よく出来ました。簡単な付与は、実はもう神宮司さんは実現できています。ただそれをもっと細かく、もっと確実に、時間と密接に関わらせるのが、エンチャントの奥義なのです」

「そうだったのか……」

「あと、エンチャントは、少しだけ遅らせるのも難しいです」

「え、どうして？」

「ウフフ、呪文が長くなって、どうしても発動そのものは遅くなりますから」

「あ、そうか。呪文を唱え終わらないうちに、その遅らせたい時間が来ちゃうのか」

「その通りです。そうなるかと最早時間そのものを制御するしかありません」

「うむむ、難しい……」

「まずは神宮司さんの得意な魔法からやっつけていきましょう」

「う、うん……わかった！」

* * *

午前一〇時、彩は汐碕市の市庁舎前にいた。
汐碕市役所は、解るものが見ればその建物がただの市庁舎ではないことが、一目瞭然であった。

門に結ばれた浄化の印、そして鬼門と裏鬼門の配慮、建物自体は魔法陣を元に配されている。
「フン、和洋折衷わやうせつちゆうも甚ただしい」

彩は吐き捨てるようにそう言うのと、市役所の入り口をくぐった。
受付で市長との面会を取り付け、エレベーターに乗る。

もともと、面会の予約などありはしない。

しかし彩の力を持つてすれば、役所内のスケジュールを改竄かいざんすることなどたやすいことだった。しかし、市長本人の予定まで変えることは出来なかったが……。

「ほう、獣が一匹、入り込んだか……」

執事が彩を市長室に招き入れると、雪景色を眺めていたルイーゼは苦々しくそうつぶやいた。「ウォルター、其奴が私の命を狙う者だったらどう責任を取るつもりだったのじゃ？」

そして怒りを抑えつつも、彩を案内した執事を睨みつける。

「は……な、何のことでしょうか、ルイーゼ様？」

だが執事は何のことか解らず、間抜けな声を返した。

「ふん……」

と同時に、鋭い風が吹き抜けたかと思うと、それは彩の身体を包み込み、そしてそのまま後ろの廊下へと突き抜けていった。

「あ……!!」

驚いたのは執事だった。

人間に化けていた彩の変身が解け、そこには彩の本来の姿があった。

「そういうことじゃ、ウォルター」

「で、ですが確かに予定表には、この方との面会が……」

「そんなもの、この畜生の力を持ってすればどうとでもできるのじゃ。己の目で確かめることを忘れてはならぬ」

「め、面目ございません……」

「解ったら下がれ」

「は……」

執事は足をふるわせながら、彩の横を通り抜け、部屋をあとにした。

その一部始終を、ニヤニヤしながら彩は眺める。

「すまぬのう、部下の教育が行き届いておらんで……」

「ん？ べつに気にしないわよ、そのおかげでここに入れたんだしね」

「入れたくなかったと言っておるのじゃ、畜生」

「まあ、そうでしょうね」

「さて、何用じゃ？ いや、用件なぞ、一つしかない、か」

「そうね、そもそもあたしがわざわざ出向くようなことでも、ないんだけどねー」

「ならば、帰ってくれぬか？ 妾は畜生を相手にするほど、暇ではないのじゃ」

「そうしたいのは山々なだけどさー、ま、一縷いちろの望みをかけてとりあえず来てみたわけよ」

「ふん、畜生が人間に願い事をしに来るか」

「……こつちが下手に出てるからってイイ気になるなよ、小娘っ」

「フフ、短気なところは相変わらずと言うところかのう？ お主のことは知っておる。お主を

恨んでいる者が、今でもたくさんいることもな」

「あんときゃあ、橘家やホラント家にもずいぶん邪魔をされたわ」

「じゃが、お主を封じるまでには至らんかったと聞いておる」

「ま、どうせそのあとすぐに封印されたけどね」

「殺生石か……」

「今じゃ田舎で、いんとん隠遁生活よ」

「隠遁じゃと？ お主の言うことなど、信用できぬな」

「あ、そう」

「じゃが、妾の目の前に来るほどじゃ、よほどあの娘が気になるのじゃな……」

「あたしもどうかしてるわ。人間一人のために、こんな危険を冒してね……」

「まったくじゃ、リスクが大きすぎるぞよ？ お主のような力ある者が何の前触れなく妾に会いに来るなど、誤解されたらそれこそ大変なことになるところじゃ」

「それだけの覚悟をして、来たつもりよ」

「それほどまでに、かの冷泉天音を護りたい……か？」

「でも、あなたにお願いをするまでが限界ねー。これ以上のことは出来ないわ」

「つまり直接、冷泉天音を護る意志までではないと？」

「そこまでのリスクは、まだ背負う気にはならないわねえ」

「ならば、諦めるのじゃな」

「やっぱそうなる？」

「それ以外の答えは、あり得ぬ」

「そう……」

「じゃがお主の気持ちには、よく解る。妾とて、あの不幸な冷泉天音の命を奪うことは、不本意じゃ、実に不本意なのじゃ。あまりにも不憫すぎる……」

「天音の生い立ちを知っているのね」

「知っておる。その生い立ちも、そして……お主の村で起きたこともな
「！」

「安心するのじゃ、妾は冷泉天音を屠^{ほぶ}る所までが契約じゃ。そこから先のことは妾たちには関係のないことじゃ」

「なるほど……」

「聞け、畜生。この問題は、妾たち人間だけの問題じゃ。冷泉天音はお主の民ではあるがしかし人間じゃ。賢者は六〇〇人と決められておる。それが妾たち人間の掟であり、契約なのじゃ」
「でも、天音がどうい子か知ってるなら、あなただって解るでしょ。あの娘がこの世界のバランスに関わるような子なんかじゃないって」

「うむ、冷泉天音は虫をも殺さぬ、優しく、穏やかな娘^{むすめ}じゃ」

「じゃあ……！」

「しかしながら、お主の民じゃ。そこがまず問題じゃな」

「う……！」

「そして、冷泉天音本人の強い信念も見過ごせぬ。彼奴は魔の力を信じ、魔にすべてをかけ、本当に魔を会得しおった。その岩をも貫き通すほどの信念と実行力は、充分に脅威なのじゃ」
「そのような娘が、お主の元でこのまま成長を続けければ、気も変わるといふもの、違うかな？」
「……………」

「フフ、否定はせぬか」

「お主も世界中から注目されておるぞ？ いつ、墓守をやめるのか。いつ、その恐ろしく猛々しい力を磨き始めるのか」

「そんなの、当分ないわ」

「どうかのう？ お主は世界の誰からも信用などされておらぬ」

「フン……………解っているわよ」

「じゃから、お主が冷泉天音の保証人になりたいと思っっているなら、それは叶わぬことじゃ。法の者と、不偏ふへんの者はだれ一人として、お主に投票すまい」

「そうよね……………」

「冷泉天音を、妾の民にすれば……………あるいは……………いや、ムリじゃろうな」

「天音の今までの記憶を奪うのはどう？ 封印でもいいわ」

「その場合はマルタ預かりになるが、良いか？」

「あ、そう……………それはそれでめんどくさいわね」

「クッククック、その気持ちは痛いほど解るぞよ。あそこに借りを作ると、ロクなことにならぬからのう。我が街にもマルタの根城があつて非常に困つておる。そもそも、冷泉天音を見つけ、妾に報告してきたのは彼奴らじゃからな」

「余計な事を……」

「すこしでもバランスが崩れる要素があれば、彼奴らはすかさず嗅ぎつけてくる。それがマルタの、不偏の者の役目でもあり、力でもあるのじゃ」

「……」

それから二人は、しばらく黙ってしまった。

二人の会話は確かに平行線ではあるかもしれないが、二人の思いは同じだった。冷泉天音を殺すことは、二人とも本意ではないのである。

「さて、話は以上か？」

ルイーゼの方が、先に沈黙を破った。

「そうね」

「妾は忙しい」

「結局、平行線、か」

「当たり前じゃ。お主たち渾沌の者に、妾たち法の者が交わろうはずもない。もし交わるようなことがあればそれは……」

「殺し合うとき、くらいかしらね」

「そうじゃ。それにな、畜生よ」

「？」

「たどえ冷泉天音がどんなに心優しい子で、虫をも殺さぬような者であったとしてもじゃ、だからといってそこで例外を認めることは絶対に許されぬのじゃ」

「なぜ？」

「それがほころびとなるからじゃ。些細な小さな取るに足らないことだからといって、それを許せば、それが前例となってしまう。一つ前例が出来れば、それがきっかけとなり、また別の前例が出来てしまうものじゃ」

「ほんの少しでいい、まだ未熟なのだから一人ぐらいは大丈夫だろうというその気持ちだが、やがてより大きな存在を許すことになり、いつの間にか賢者同士のバランスが崩れ始める。どんなに残酷であろうとも、こればかりは止めねばならぬのじゃ」

「そう……」

「ククク、お主たち渾沌が使う手と同じではないかな？」

「え？」

「ほんのちよつと、これぐらいのことはいいだろうと、お主たち渾沌は我らを誘惑する。ほんの少し、誰にもバレない、これぐらいのこと……とな。しかしそれが落とし穴なのじゃ。その

誘惑に乗ってしまったえば、あとはエスカレートするのみ。冷泉天音の件も、まったく同じじゃ」

「まったく、頑固ねえ……」

「フン」

「それに、妾たちだけで決めたところで、マルタもシュレンベルグも納得はすまい？」

「伊勢も出雲もね」

「そういうことじゃ。法の者とはいえ、妾も妾たちのバランスの上に立っておる。そして渾沌

とはいえ、お主もそのバランスの一翼を担っておる。妾たちはそれだけ強大な存在なのじゃ。

その強大さゆえに、責任もまた大きいのじゃ。好き勝手に動き回することは、許されぬのじゃ」

「はいはい、解ったわよ、邪魔したわね」

彩はくりりとルイーゼに背を向けると、肩をすくめて、そして部屋から出て行こうとする。

「耳と尻尾は隠して出て行った方がよいと思うがのう？」

「あっ……」

「フフ、ずいぶん慌てようじゃ。お主の冷泉天音を思う気持ち、しかと受け止めたぞよ？」

そして、その心は、妾も一緒じゃ」

ルイーゼは優しい声でそう言うと、彩を見つめ、それから目を伏せて首を左右に振るのだっ

た。

* * *

放課後、聖天翔学園の生徒会室には常連が一人増えた。
冷泉天音である。

「お邪魔します」

午前中は鈴鳴屋を手伝い、そして放課後になるとこの場所へ。

午後は天音の代わりに雛子が鈴鳴屋を手伝う。

それが暗殺者から逃れる方法の一つだった。

「何もお構いすることはできないけど、ここなら安全だよ」

光人はそう言って笑顔为天音に手向けた。

「事情はすべて伺っていますから」

瑠璃火も優しい笑顔で天音を迎え入れた。

「ありがとうございます」

そしてそれ以上は天使達は天音に何も尋ねることはなかった。

そもそもこの生徒会室の中でさえ、その微妙なバランスがおり混ざってしまっている。

市長と同じ法の者である、瑠璃火、水帆、水翼。

彩と同じ渾沌である、雛子と天音。

そして両バランスを監視する不偏の者に属するのは、朝日奈やすらである。

光人と言えば、形式上は法の者ではあるが、まだどのバランスに入ることも表明していなかった。

「おー!」

そこへ水翼が天音を見るなり、大声を上げた。

「おまえ、よく生きとるなー!」

「え？」

そして天音の頭をつかむと、まじまじと顔をのぞき込んだ。

「おおっ、ここもか! ここも! ここも!」

「あ、あの……」

「光人、光人、こいつすごいぞ!」

「うるさいぞ、水翼。人にはそれぞれ事情があるんだ、そっとしておけ」

「なんだあ、つまらん」

「もうちよつと大人になったらどうだ？」

「なんだと!? むかついた!!」

「あ、しまった」

「なあ、天音、ボクが治してやろうか？」

水翼は得意そうに笑うと、つつーっと天音の身体をなぞった。そしてその軌跡は、天音にとつてなぞられたくない場所をたどっていた。

「あなたは……」

天音が不安そうな面持ちで、この小さな天使を見つめる。

「苦しがるう？ 光人は放って置けなんて言ってるけどー」

「……」

光人はただ黙って書類を整理している。

「こんなムリヤリくつつけてるだけの身体じゃ、いつバラバラになるか解らんぞ？」

そして水翼は天音のおへその少し上のあたりをつつく。

「……！」

痛みのようなしびれのような感覚が、その場所から全身へと伝わっていく。

そういう魔法で治療したばかりの頃は、この感覚が全身で起き、動けなかったことを天音は思い出した。

「いいんです、それがわたしですから……」

天音は無理に笑顔を作る。

「そかそか。そうだよナ、天音の力の証でもあるものナ。それをボクがいじるのは野暮というものだ、うんうん」

「べ、別にそういう意味では……」

「でもな、間違ってるところは治した方がいいのー」

「間違っているところ……ですか？」

「うんむ！」

水翼は自信たっぷりと言うと、天音の身体をまさぐり始めた。

「あ、あの……」

「胸腺の細工が間違っておる。それからリンパ節の接続もムリをしているところがあるのう。卵巣の中はグチャグチャじゃ。まあ、卵管には出ないようになってるみたいだがノ。それにしても乱暴すぎる処置なのだ」

「筋肉繊維はほつれがあるし、腎臓も肝臓も完全に活性化しておらん。これじゃあ、すぐに疲れたり病気になるったりするのだ」

「機能しておらん部分もあるし……ま、所詮人間の魔の力は、こんなもんかのー」
「……………」

「一番問題なのは神経だな。ちゃんとつながつたらんところが山ほどあるゾ。腺も手抜きだらけだナー。これではホルモン類が行き渡らん」

「そ、そうですか……」

「ホントお前、よく生きてるナ」

「……………」

「不具合のあるところは、そのうち癌化するゾ？ 免疫系も抑えるのはいいが、ムリヤリ過ぎる。徐々に自分の細胞に置き換わるように細工するべきだな。そうすれば、魔で修復しながら生きなくていいし、魔の痕跡も消えていくのだ」

「魔の……痕跡……」

「ハッキリ言ってしまうえば、天音は……」

「はい」

「まだまだ未熟ってことだな。中途半端な魔の力で、ムリヤリ命をつなぎ止めとる」

「やはり……そうなのですか……」

天音は悲しそうに視線を落とした。

「んーと、このへんをこうしてだなー……」

「あ、ちよ、ちよっと……!!」

水翼が天音のスカートの中に頭を突っ込んでいた。

「まっ……!!」

瑠璃火が顔を真っ赤にする。

「水翼、やめなよお」

水帆が慌てて水翼の足を引っ張った。

「あー、こりゃいっぺんに治すのは、難しいのう」

「いいんですよ、もともと生きられたかも解らない身体でしたから……こうして一四年も生きられれば、充分です」

「諦めの早いやつめ。せっかくボクたちと知り合えたんだから、遠慮すんなって」

水翼はそう言うと、天音の頭に手をかざした。

「んー、まーいじれるところだけいじっちゃうかー」

そして天音の返事も聞かずに詠唱を始める。

「In nomine Patris, et Filii, et Spiritus Sancti……」

とはいえ水翼の唱えるそれは呪文と言うよりは祈りの言葉であった。

水翼が祈り始めると、瑠璃火も水帆も、そして光人もともに祈った。ただ、やすらだけが黙ってその様子をじっと見つめていた。

彼女だけは知っている。

この目の前の少女が、殺されなければならない存在だと言うことを。

いや、殺されなければならないのが、この少女なのか、それとも汐碕市長の手の者か。そしてそれを決めるのは自分たちではないこともやすらは十分に理解していた。

「ほら、これでどうだ？」

一同のアーメンという言葉が終わると、水翼がにっこりと笑った。

「全然違います……」

何となく身体全体を覆っていた気怠い感覚、遠くの方で感じていたポーツとした感じ、ちょっと苦しかった呼吸、筋肉を締め付けるような圧迫感、それらがとれてまるで身体が軽くなつたかのようなスツキリした感覚を天音は感じ取った。

「神経と腺類のつながる先を正しくしたのだ。それと免疫系の再学習と胸腺の間違った細工を適用し治してだな。それからホルモン・バランスを含めた内分泌系の正常化だな。個々の臓器はいじっておらん。まずは下回りをちゃんとしたって感じかのー」

「ありがとうございます、さすが天使です」

そう笑顔を浮かべた天音だったが、心中は複雑な思いだった。目の前の自分よりも小さな女の子が、一度の祈りで自分の間違っていたところを治してしまう。

死ぬ思いをして培ってきた自分の魔の力よりも遙かに高等な力を、一瞬で、触媒もなく、ただ言葉だけで成し遂げてしまう天使の力。

天音は増々自分が惨めな存在だと言うことを再認識してしまった。

「天音は解らない所をテキトーにやり過ぎているのだ」

「そ、そうですか……」

「命を扱うのは難しいゾ、天音。ボクはお勧めせん。けど、ま、自分の命が関わってるから、仕方ないナ」

「……………」

天音は違うとそこで否定できなかった。本当は兄のためだと……そのために魔を身につけたのだと……けれど、それをこの天使達に告げる勇気はなかった。

「あまり肩入れしちゃダメよ、水翼」

ずっと黙っていたやすらが口を開いた。

「んあ？」

「その子を救うなら、その子が賢者になってからにしないと」

「賢者？」

「あ………」

やすらがしまったとばかりに、右手で口を押さえた。

「賢者って何だ？」

「なんでしょうね」

やすらが慌ててそっぽ向く。

「んー、なんか怪しいぞ？」

「朝日奈さんは、賢者さんなのですか？」

天音はやすらを真剣なまなざしで見つめた。

「あたし!？」

「はい」

「あたしは、そのー」

「こいつはなー、殺し屋」

「ぼそつと水翼がつぶやく。」

「ちよ、ちよつと、そんな物騒な言い方ないでしょ!？」

「それじゃ、作業員、諜報員、スパイ、暗殺者、なんでもどうぞ」

「光人まで!!」

「怖い方なのですね……」

「そ、そんなことないわよー。明るくて、元気で、かわいい女子高校生よっ!」

「自分で可愛いって言うかー?」

「なぐるわよ!」

「あいた!! もう殴ってるがな!」

「朝日奈さんが賢者さんなら、朝日奈さんは人を殺したことがあるってことでしょうか」

天音はやすらへの恐れを振りはらって、やすらを見上げた。

「ひゅー」

あまりのそのストレートな質問に、水翼が口笛を吹く。

「……………」

一方のやすらは、返答に困って腕組みをしてしまった。

「残念ながら、俺たちは賢者ではないんだ、天音さん」

代わりに光人がゆつくりと話し出した。

「天使だというのは伺ってました。けれど、朝日奈さんは祈りに参加していませんでしたから……てつきり天使ではないのかと……」

「ここにいるのはみんな天使さ。もつとも、まだ未熟だけれどね」

「未熟……ですか……?」

「ただ、その質問をやすらにしたのは、正解だったかも知れないね」

「え……?」

「光人……!」

「この中で、やすらが一番この世界のタブーに関わっている」

「タブー……?」

「俺たちはまだ天使として目醒めたばかりで、天使としての力も未熟だし、この世界のこともよく知らない。けれど、どうやらこの世界には人間の常識を越えたよく解らない存在があるみたいなんだ」

「天使にそんなこと言われたくないでしょうけれど……クス」

瑠璃火がバツが悪そうに笑った。

「はい、どうやら、わたしはそのよく解らない存在になってしまったようなんです」

「知っているよ、だから俺たちは正体を隠してないんだ」

「あ……」

「で、そのよく解らない存在のことを、賢者って言うのよ」

やすらはやれやれといった調子で、つぶやくようにそうつけ加えた。

「ま、俺たちの中でも、そのよく解らない存在がいる世界に関わっているのが……」

「朝日奈さん……なのですか」

「そういうこと」

「でも賢者じゃないのなら……聞いてもあまり……」

「何が知りたいの？」

やすらは天音の正面に座ると、天音の手を取った。

「あ……」

「フフ、人を殺したことがある、手よ」

やすらは低い声でそう言うと、ほくそ笑んだ。

さすがの天音は恐怖心で、その手を引っ込めようとしたが、何とか踏みとどまった。ここで逃げてはいけないと、思ったからだった。

「どうして……天使であるあなたが、人を殺める必要があるのですか？」

「仕事だから」

「ええ!？」

「そういうお仕事なの、あたしの場合は。ま、兵隊さんみたいなもんかしらね」

「兵隊さん……」

「立場は警察官だけどナ」

「まーねー」

「殺す命令が来るのですか?」

「そ。言うなれば、あなたの命を狙ってる奴と、立場は近いかもね」

「あ……」

「あなたの命を狙ってる奴も、上司からあなたを殺すように命令されてるの」

「そ、そういうことなのですか……」

「だから……どんなときでも、殺しの司令が来れば、あたしはそれを遂行しなければいけない。

けど、人を直接殺すことってあまりないわ。あたしが相手をするのは、どっちかって言うとお悪

霊とか魔物とか、魍魎魍魎がほとんどね」

「そ、そうだったのですか……」

「しかもこの街に何か危害を加えようとするような奴が相手よ。人間の犯罪者がいるように、

魍魎魍魎にも悪い奴はいるからね」

「なるほど、そういう方面の警察官というわけですか」

「うん、そういうこと。霊や悪霊なんかは話を通じないからね、残念ながらご退場願うしかない。逮捕とかそういうのはあんまりやらないの」

「そう、ですか……」

「で」

「？」

「何を知りたいの？ あたしの仕事を知りたかったわけじゃないでしょ？」

「あの……人を……」

「人を？」

「人を殺すって、どんなことなのか……どんな気持ちになるのか……知りたかったのです。わたしが生き残るためには、わたしを殺そうとしている人を殺さなくてはいけないみたいなんです」

「そうね」

「でも……そんなことは……わたしはとて……」

「そういう意味では、人を殺したことのない賢者って、いないのかも」

やすらが、ふうとため息をついた。

他の天使達は、この二人の会話に入っていくことは出来なかった。

光人は殺されたことはあっても、殺しに関わったことはない。瑠璃火も水帆も同様。水翼がやすらについて、わりとシニカルな決断を下せる天使であろう。死ぬ者は死ぬし、生きる者は生きる。水翼は運命を素直に受け取り、死の運命を否定しないことが多いのだ。

「残念だけど、あたしの感覚は人間とは違う……」

しばし空を見つめていたやすらは、首を左右に振ると、天音に視線を合わせた。

「それにそんなことを聞いても、他人事でしかないと思うの。あなたが決断して行動を起こすか否か、それだけじゃない？」

「……………」

「相手はもう決断してしまっている。あなたを殺す、と。このままあなたが何もしなければ、あなたは殺される」

「はい」

「ただね？ 殺されてもいいのになって、そういう思いがあたしにはあるわ」

「お、おい、やすら、何を言い出すんだ」

「だって聖書にも書いてあるでしょ、『汝、殺すなかれ』。人を殺す権利は、誰にもない。もしこの子が人を殺めるなら、それは罪を犯すことになるのよ。賢者になれたとして、果たしてこの子は良い人生を歩めると思う？」

「朝日奈さん……………」

「いかなる時も決断は主がしてください。つまりこの子がとるべき本当の道は、神に祈って守ってもらうこと。それが神の御心ならば、例えどんな殺し屋が来たって殺されないと思う。殺されるのなら、それは神様が呼んでるんじゃない？ 天国へ来なさいって」

「模範解答過ぎるのだ、やすら」

そこへ水翼が口を挟んだ。

「あによ」

「だいたいやすらが言っても説得力がない気がするのー、この殺し屋めー」

「フン、解ってるわよ。あたしだったら返り討ちにしてやる！」

「いえ、やすらさんの言葉、今のわたしに一番しつくりくるような気がします。わたしの魔力は、人を殺すために身につけたわけではありません」

兄を生き返らせるため。

本当にそれだけのための力。

それが天音の魔力。

「ですから、無理にわたしに出来ないことをして、無理に寿命を延ばし、無理に賢者になっても……」

「そう、その先に愛する兄はいない。」

その先にあるのは、孤独だけ。孤独だけが、ぼつんと天音を待っている。

「無理な人生を歩むことになるのだと思います」

天音は目を閉じて、そう締めくくった。

その声は少し震えていた。

死が怖いのだ。

それは否定できない。

それでも天音は、これ以上、魔の力で自分の未来を切り開くべきではないと決心した。